ピジン・クレオール言語とコードスイッチングおよび中央アジアのリングァフランカとしてのロシア語について（注1）（注2）

On Pidgins, Creoles, Codeswitching and the Russian Language Spoken as a Lingua Franca in Central Asia

柳田　賢二 (Kenji YANAGIDA)*

キーワード：ピジン、コードスイッチング、中央アジア、ロシア語
Keywords: pidgins, codeswitching, Central Asia, Russian

1 はじめに

19 世紀の比較言語学のように「言語変化」による「新言語の発生」を系統論的な「分岐」と同義であると考えることは言語の通時態の一面だけを見て他から目をそむけるに等しい態度であるということについて、今日では多くの言語研究者が気付いている。下述のような言語接触にかかわる社会言語学の成果に基づく視点は、「複数の言語の単語が混ざることはあっても文法が混ざることはない」という命題の当否についての正しい答を出すことに繋がる可能性を十分に持っていると考えるべきである。そして、こうした観点は、特に中央アジアのような多言語社会における言語の変化・発達や新言語の成立について考えるに当たってはとりわけ重要となるはずである。

1.1　ピジン・クレオール言語について

最近の言語学では社会言語学、とりわけ言語接触研究という分野が隆盛の様相を見せており、特に、複数言語の接触による言語のピジン化という現象と、クレオール語と呼ばれる新言語の発生が注目を受けている。ピジン、クレオールという用語は、概ね次のように定義される。

ピジン (pidgin)（注3）—共通語を持たない人々の間に起こる、ある一定の限られたコミュニケーションの必要（例えば交易や航海）を満たすために生まれる簡略化された補助言語を「限定ピジン」という。これが言語社会の母語にまではならなくても、多言語地域において極めて重要な言語になってその有用性のために拡大され、発生当時の限られた機能を越えて使われることもある。これを「拡大ピジン」という。ピジンの発生については、例えばプランテーションの奴隷たちの母語が違って相互に言葉が通じないことから農園主の言語であ

* 東北大学東北アジア研究センター

る英語やフランス語を簡略化させて話さざるを得ず、それらを基盤としたピジンが発生したような場合に限られ、単に2つの言語の接触では起こらないという考えもある。しかし後出のロシア語・ノルウェー語ピジン（ルッセノルスク）やロシア語・中国語ピジンといった、主に2つの言語の話し手のみによって使われたピジンがかつて存在したことは、この考えが正しくないことを示す。

クレオール (creole)—ピジンがある言語社会の母語となったもの。ピジンの話者たちが自分の母語を使って伝達できないような立場に置かれたとき（例えばプランテーションの奴隷で、母語が相通じない者同士が結婚して家庭を築いた場合）、あるいは、ピジンがある言語社会の共通語として非常に便利になって拡大され、市場や教会のみならず同じ母語を持つ人々の家庭でさえも使われるようになったとき、その子供たちは自分の第一言語の一つとしてピジンを習得するようになる。そのような子供たちにとってそれは既に母語であるということができる。この段階に達したものをクレオール言語という。これはもはや完全な「言語」であって、人間の経験のあらゆる分野を表現できるように語彙が拡大され、より精巧な統語体系が発達する。

1.2 ピジン、クレオールの特徴（英語基盤ピジン、クレオールの例）

ここでは、まず地球上の広い範囲にわたって多くの変種が分布している英語基盤ピジン・クレオールのうちネオメラネシア語（注4）（ニューギニア・英語クレオール）とカメルーン・ピジン（西アフリカ・英語拡大ピジン）を例にとって、ピジン化による文法の簡略化とはいかなるものであって、基盤となった言語とどのように異なってしまうものかについて一瞥してみることにする。

1.2.1 次の表に表れているように、名詞が屈折による総合的（synthetic）な複数形を持たず、すべて不変化である。複数性は、普通文脈から明らかになる。

表1　ピジン・クレオール語名詞における複数性の表現の例

英語	ネオメラネシア語	カメルーン・ピジン	日本語訳
one **man** / person	wanpela **man**	wan **man**	1人の男性
ten **men** / people	tenpela **man**	ten **man**	10人の男性
lots of **men** have no wives	plenti **man** i no get meri	plenti **man** no get woman	多くの男性には妻がいない

［トッド 1986:32 より転載］

1.2.2 代名詞については、英語の体系が縮小され、主格以外の格は脱落することが多い。但し、次の表2において太字で示したように、標準英語にはない区別（2人称における単数/複数や1人称における inclusive / exclusive :「話し相手を含む/含まない」）が発生しているものもある。

表2　ピジン・クレオール語における人称代名詞の例

ネオメラネシア語				カメルーン・ピジン				
人称	単数	複数		人称	単数		複数	
		exclusive	inclusive		主格	非主格	主格	非主格
1	mi	**mipela**	**yumi**	1	a/mi,a	mi	wi	
2	**yu**	**yupela**		2	**yu**		**wuna**	
3	em	ol		3	i	i/am	dem	dem/am

[トッド 1986:32 より改変のうえ転載] (注5)

文例：

(1) 英語：　**He/She/It** is not carrying a bag.

ネオメラネシア語：　**em** i no karim ruksak

カメルーン・ピジン：　i no di kari kwa

(2) 英語：　**We** don't know how to shoot pigeons.

ネオメラネシア語：　**yumi**(you and I) no sabi shut balus

mipela(me and others) no sabi shut balus

カメルーン・ピジン：　**wi** no sabi shut pijɔn

(3) 英語：　**You**(pl.) went to eat.

ネオメラネシア語：　**yupela** go long kaikai

カメルーン・ピジン：　**wuna** bin go chɔp

[トッド 1986:33 より転載]

1.2.3　動詞は語形変化せず、名詞も不変化なので主語・述語の形の一致はない。時制や継続性は、文脈から理解されるか、もしくは副詞または、動詞の前に置かれる語句により示される。

表3　カメルーン・ピジンにおける動詞の不変化化の例

英語	カメルーン・ピジン	日本語訳
I am eating at the moment	jɔsnau a **di chɔp**	今食べているところだ
I have only just eaten	a **dong chɔp** nau nau	今ちょうど食べ終わったところだ
I ate yesterday	yestadei a **bin chɔp**	昨日食べた
I'll eat tomorrow	tumɔro a **go chɔp**	明日食べよう
I would have eaten if…	a **fɔ dɔng chɔp** if …	もし～なら食べただろうに

[トッド 1986:35 より転載]

1.2.4　統語関係は語形変化によるのではなく、語順によって表される傾向にあり、その結果、ピジン化されない標準的な言語よりもはるかに語順が固定され、厳格に守られる。

1.3 遠く離れたピジン・クレオールの間に見られる類似について

1.3.1 英語やフランス語を基盤とするピジンやクレオールは遠く離れた地域で話されているにも関わらず語彙の類似が著しく、互いに通じることすらよくあると言われる。英語基盤ピジン・クレオールの語彙を比較した表4を見れば、その原因は、このような基本的な語彙でさえ現地語ではなくて英語から取り入れられているということであることが一目瞭然である。

表4　英語基盤ピジン・クレオール間の基本語彙の類似

英　語	クリオ語	カメルーン・ピジン	ジャマイカ・クレオール	スラナン語	ネオメラネシア語	日本語訳
arm/hand	an	han	han	ana	han	腕，手
back	bak	bak	bak	baka	baksait	後ろ，背中
blood	blɔd	blɔd	blɔd	brudu	blut	血
head	ed	hed	hɛd	ede	het	頭
stomach	bɛlɛ	beli	bɛli	bele	bel(i)	胃，腹
ask	aks	aks/as(k)	(h)aks	aksi	haskim	尋ねる
come	kam	kɔm	kɔm	kɔm	kam	来る
give	gi	gi(f)	gi	gi	gifim	与える
go	go	go	go	go	go	行く
take	tek	tek	tek	teki	tekewei	取る

[トッド 1986:25 より転載]

1.3.2 さらに、英語基盤とフランス語基盤の、つまり基盤言語を異にするピジン・クレオール間においてすら、奇妙な類似が見られることがある。

表5　英語基盤とフランス語基盤のピジン・クレオール間に見られる奇妙な類似の例(1)

英　語	カメルーン・ピジン	フランス語	ハイチ・クレオール	日本語訳
he/she is bigger than you	i big **pas** yu	il/elle est plus gros que vous	li gro **pas** u	彼/彼女はあなたより大きい

[トッド 1986:26 より転載]

この例では、カメルーン・ピジンは英語基盤、ハイチ・クレオールはフランス語基盤であるにも関わらず、英語の than に相当する語として同じ pas という語が用いられている。

表6　英語基盤とフランス語基盤のピジン・クレオール間に見られる奇妙な類似の例(2)

英　語	クリオ語	フランス語	セイシェル語	日本語訳
it's not very hard	i no tu had	ce n'est pas très difficile	i pa tro difisil	それはさして難しくはない

[トッド 1986:26 より一部改変のうえ転載(注6)]

この例では、否定文中で用いられた英語の very およびフランス語の très（いずれも肯定文では「とても」の意味だが、否定文中では「さして（…ない）」の意味になる）に対応する語が英語 too、フランス語 trop（いずれも「あまりにも」の意味）に由来する語になっている。

2 西欧語基盤ピジン・クレオール諸語間の相互類似の原因をめぐって

この奇妙な類似の原因を説明するために、幼児語説、独立平行発達説、航海用語説、単一起源説、語彙入れ替え説、総合説（「言語は根本的に似ており、単純化の過程も似ているために、ピジン・クレオールも似る」、「ピジン、クレオールの構造が簡単であるということは、言語本来の普遍的制約による」との考え）などの諸説が提示されてきた。これらのいずれもある程度の説得力を持つものであると言うことはできるにしても、そのいずれを取ってみてもこの基盤言語を異にするピジン・クレオールの間にまで見られる奇妙な類似にまで至る現象をそれだけで網羅的に説明するに足るものとは考えにくい。しかし、こと英語、フランス語、ポルトガル語、オランダ語、スペイン語といった西欧諸語を基盤とするピジン・クレオールに限って考えると、「単一起源説＋語彙入れ替え説」が他と比べて重要な意味を持つ可能性が高い。

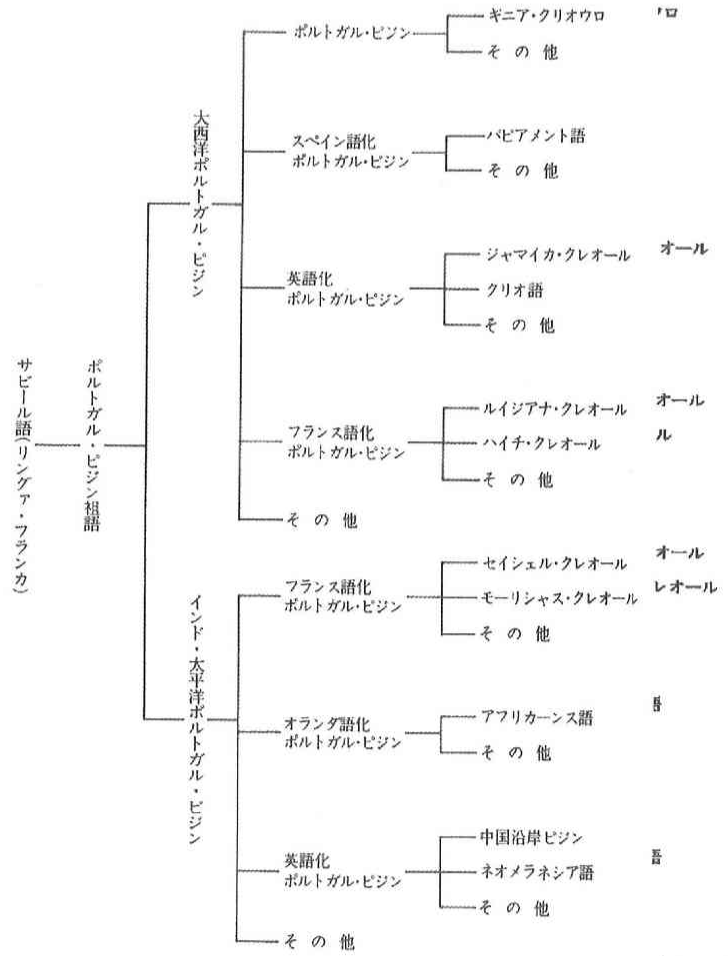
2.1 単一起源説＋語彙入れ替え説について

トッド[1986:66-76]によれば、この説は、次頁の図1に示すように、西欧諸語基盤のピジン・クレオールはすべて15世紀のポルトガル語ピジンから派生したと考え、さらに、この「ポルトガル・ピジン祖語」について、中世の十字軍兵士や地中海沿岸の商人たちが話していた、主にイタリア語語彙を基盤とする混成語であるサビール語（リングァ・フランカ）の名残りであったと考えるものである。このサビール語自体が動詞の不変化化など近代の接触言語と共通する簡略化の性質をすでに持っていたのだが、15世紀になってポルトガル人たちが西アフリカの沿岸を航海したとき、彼らはポルトガル語の影響を受けたサビール語を話したであろうし、西アフリカの人々が最初に覚えたヨーロッパ語はこの言語であって、それが「ポルトガル・ピジン祖語」となったと考えることができる。そしてその後の16世紀以降にはポルトガルの勢力が弱まってこの地域に来航するヨーロッパ人がポルトガル人からスペイン人、オランダ人、フランス人、イギリス人に代わった。それらの人々も最初はこのポルトガル語ピジンを話さざるを得なかったが、さらにその後、このピジンの語彙がこれらの国々の人々が話す、地域と時代によって異なる西欧語のそれに置き換えられていったために、様々なピジン・クレオール諸語が発達したとこの説では考えるのである。さらにポルトガル人は、例えば日本に来航した最初のヨーロッパ人であることからも明らかなように、アジアにも早い時期に至っていたので、この「ポルトガル・ピジン祖語」がアジア・オセアニアの「中国沿岸ピジン英語」やその近代における後裔である「ビーチラマー（Beach-la-Mar）」や「ネオメラネシア語」（ニューギニア）等の英語系ピジン・クレオール諸語の原型となっ

た可能性もある。実際、トッド[1986:69-70]には、17-19 世紀に、アフリカの海岸沿いや東洋、西インド諸島などでリングァフランカと「ひどいポルトガル語」(bastard Portuguese)と呼ばれる言語が話されていたことを示す記録がいくつか引用されており、この「ポルトガル語ピジンがすべての西欧語ピジンの原型となった」とする説は、一見して思われるほど荒唐無稽ではない。そして、この説に従えば、英語ピジン、フランス語ピジンというものは、より正しく言えば「英語化ポルトガル語ピジン」、「フランス語化ポルトガル語ピジン」であるということになる。以下では、そう考えるべき根拠について詳述する。

図 1

ヨーロッパ諸言語基盤のクレオール



[トッド(1986, p.77)より転載]

2.2 英語基盤ピジンに見られるポルトガル語系語彙

あるピジン言語において、例えばポルトガル語語彙から英語語彙への大規模な入れ替えなどという現象が容易に起こるということは、確かに通常考えにくいことである。しかしながら、この説によってしか説明できない現象が現に存在することもまた事実なのである。

トッド[1986:30]は、英語ピジン、英語クレオールについて「その語彙の中核を英語から取り入れているために、語彙の面で互いに似ているのであるが、もう1つ共通する類似点は、それらすべてがポルトガル語起源の単語をいくつかもっていることである。ほとんどの場合、ポルトガル語の要素は数パーセントであるが、スリナムのクレオールであるサラマッカン語（Saramaccan）のように、約30%に達するものもある。例えば、どのピジン英語、クレオール英語にも know（知る）に対して saber を、little（小さい）とか offspring（子孫、子供）に対して pequeno という形がある(注7)」という驚くべき事実を指摘している。

1.2.2 において、英語の代名詞にない inclusive/exclusive の対立がネオメラネシア語において発生している例として次の文例を示し、この現象が現れていないカメルーン・ピジンと対比して示した。この例において、ネオメラネシア語とカメルーン・ピジンの双方で英語の know に対応する動詞として使われている **sabi** は、正にこの saber というポルトガル語動詞に由来する語である。

(2) 英語：　We don't **know** how to shoot pigeons.

ネオメラネシア語：　yumi(you and I) no **sabi** shut balus

mipela(me and others) no **sabi** shut balus

カメルーン・ピジン：　wi no **sabi** shut pijɔn

また一方で、古代におけるローマ帝国の膨張やアレクサンドロスの遠征、また中世ではチンギス・ハーンとその子孫らによるモンゴル帝国の膨張などを引き合いに出すまでもなく、人類の歴史において民族の移動、他民族の征服、それによって発生した互いに言葉の通じない諸民族の接触、さらには支配的な民族によって捕獲された諸々の異民族の人々の奴隷化といった現象は大航海時代よりもはるか以前から存在していたことは明らかであり、それゆえ、ピジンやクレオール言語の発生という現象が大航海時代以降に限られると主張すべき根拠はもちろんない。したがって、「単一起源説＋語彙入れ替え説」の主張する「ポルトガル語ピジンがすべての西欧語ピジンの原型となった」という命題が仮に真実であったとしても、それが大航海時代以前の言語接触について、あるいは大航海時代以降であってもポルトガル語やポルトガル語ピジンおよびその後裔であるとされる諸西欧語基盤のピジン・クレオール諸言語とは無関係の言語接触において発生したピジン・クレオール諸言語について如何なる説明能力も有しないのは自明のことである。それゆえ、この説が妥当するのは大航海時代以降の西欧諸国による植民地争奪に関係して発生したピジン・クレオールの相互類似についてだけであるのは言うまでもない。そして何よりも、言語の語彙がごく少数の例外を除いてポルトガル語起源の語から英語やフランス語起源の語へ入れ替わってしまうなどということが現実に起こり得るなどとは、常識で判断する限り極めて考えにくく、こうした説をにわか

には信じられないこともまた事実である。

3 非西欧語基盤の限定ピジンの例

3.1 ルッセノルスク（Russenorsk，ロシア語・ノルウェー語ピジン）について

ここでは、大航海時代以降次々に覇権が移っていった西欧諸国によるアフリカ、アメリカ、アジア、オセアニアの植民地化と無関係の言語接触によって発生したピジンとしてロシア語・ノルウェー語ピジン（「ルッセノルスク」）を例に、ピジン言語、とりわけ限定ピジンとはいかなる特質を持つものであるかを浮き彫りにしたい。

ルッセノルスクとは、19 世紀初めから 20 世紀のロシア革命に至るまでの時代にバレンツ海海域で、商人、漁師、船員により、特に沿海部のロシア人とバランゲル・フィヨルドのノルウェー人の間の交換貿易の場でのコミュニケーションに用いられたピジン言語である。ベリコフ、クルィシン[Бельков В. И., Крысин Л. П. 2001:126-130]によれば、ルッセノルスクには他のピジンと異なる次のような特徴があった（下線は柳田による）。

1) 知られている約 400 の語彙のほぼ半分がノルウェー語、ほぼ 3 分の 1 がロシア語起源であった。つまり、2 つのほとんど同権的な語彙供給言語が存在した。ロシア人はこのピジンをノルウェー語だと考え、ノルウェー人はロシア語だと考えていたという報告がある。これは、18 世紀前半から用いられ始めた中国語・ロシア語ピジンにおいても同様であった。

2) 同じ意味を表す、ロシア語とノルウェー語起源の同義的な二重語（doublet）が数十個も存在しており、ロシア人はノルウェー語起源の語を、ノルウェー人はロシア語起源の語を使う傾向があった。

3) ルッセノルスクの多くの語彙は二重の語源を持つ。つまり、ロシア語とノルウェー語に同じ度合いにおいて帰せられ得るか、明らかに一方の言語に由来する場合でも、他方の言語によっても十分に語源学的に支持を受けられる。

ルッセノルスクは、«моя-по-твоя»「おれはお前のやり方で（話す）」という別名を持っていたほどで、このピジンの成立には別の言語の母語話者間での社会的なパートナーシップの認識と、独特な形で表された丁寧の原則が働いていたと考えられる。このことも上出の中国語・ロシア語ピジンと共通の現象であった。この点が、遠く離れたニューギニア、カメルーン、ジャマイカの拡大ピジンやクレオールの語彙が互いに酷似しているほど話者の本来の母語からの語彙供給が少ない英語ピジン・クレオールや同様のフランス語ピジン・クレオールの場合と異なる。

＜ルッセノルスクの文例＞

(1) Moja　paa　dumosna　grot　djengi　plati
　S　　O　　V
　私は　で　税関　大きな　金を　払った（私は税関で沢山の金を払った。）

(2) Davaj　paa　moja　skib　kjai　drikkom
　～しよう　で　私の　船　茶を　飲む　（私の船で茶を飲もう。）
(3) Kor　ju　**ikke**　paa　moja　mokka　**kladi**?
　なぜ　あなたは　ない　に　私　穀粉　持ってくる
　（なぜあなたは私に穀粉を持ってこなかったのか。）

[Бельков В. И., Крысин Л. П. 2001:129]より引用]

ベリコフ、クルィシン[Бельков В. И., Крысин Л. П. 2001:129]によれば、例文(3)に現れる否定語 **ikke** の位置はロシア語ともノルウェー語とも大きく異なるが、フィンランド語では普通なので、その影響であると考えられるという(注8)。このピジン言語の知られている約 400 の語彙のうちほぼ半分がノルウェー語、ほぼ 3 分の 1 がロシア語起源であったことは先述の通りであるが、その他に、数十の語彙が英語、低地ドイツ語諸方言、スウェーデン語、フィンランド語、サーメ語（旧称ラップ語）からこの言語に供給されたことが明らかになっている[Бельков В. И., Крысин Л. П. 2001:128]。

上に略述したベリコフ、クルィシンによるルッセノルスクの特徴に関する記述のうち、西欧語基盤のピジン・クレオールとの対比において、外見上最も顕著な差異は **1)** のうちで下線を施した部分である。しかし、**2)** と **3)** の下線部は、実は、この特異なピジンに固有の現象などではなく、先述した諸西欧語基盤ピジン・クレオールの発達過程における「語彙入れ替え」という、常識では信じ難い現象と相通ずる要素であると考えるべきなのである。これは、ピジン・クレオール言語の発達を考える上で極めて重要なことである。

3.2 ルッセノルスクにおける二重語とその役割

ベリコフ、クルィシン[Бельков В. И., Крысин Л. П. 2001:127-128]は、ルッセノルスクにおける二重語の例として下表のような対を挙げている。

表7　ルッセノルスクにおける二重語

ロシア語起源	ノルウェー語起源	日本語訳
skasi	sprækom	話す、言う
balduska	kvejta	オヒョウ（魚名）
musik	man	男
ras (注9)	tag	日
eta	den	この
njet	ikke	（英語 not に相当する否定語）
tvoja	ju	君、お前
dobra	bra	良い
tovara	vara	商品

そして、ベリコフ、クルィシン[Бельков В. И.,Крысин Л. П. 2001:129]が「ロシア人はノルウェー語起源の語を、ノルウェー人はロシア語起源の語を使う傾向があった」旨を記していることはとりわけ重要である。これは即ち、これらの二重語が存在したのは、母語の通じない話し相手に自らの言わんとすることを通じさせるためにであったことを端的に物語ってくれるからである。

また、ベリコフ、クルィシン[Бельков В. И., Крысин Л. П. 2001:127-128]が「ルッセノルスクの多くの語彙は二重の語源を持つ。つまり、ロシア語とノルウェー語に同じ度合いにおいて帰せられ得るか、明らかに一方の言語に由来する場合でも、他方の言語によっても十分に語源学的に支持を受けられる」という主張の例として挙げているのは上出の二重語 dobra/bra, tovara/vara の他に、次の表にあるような語である。

表 8　ルッセノルスクに見られる「二重の語源」を持つ語の例

ルッセノルスク	ロシア語	ノルウェー語	日本語訳
paa	po (по)	på	～へ、まで
kruski	kruzhka (кружка)	krus	ジョッキ
mangoli	mnogo li (много ли) (注10)	mange	たくさん
ljugom	lgat' (лгать)	lyve	嘘をつく

確かに、ルッセノルスクのこうした語彙は、ロシア語・ノルウェー語いずれの話者にとっても事実上上で述べた二重語と同じように感じられ、同じ役割を果たしていたと言うことができるであろう。

3.3 「限定ピジン」の特質

ルッセノルスクはロシア革命に至るまでバレンツ海の海上や港々でかなり広く用いられていたとは言っても、ベリコフ、クルィシン[Бельков В. И.,Крысин Л.П. 2001:126-130]に掲載されている当時の言語資料（主にノルウェー人の非専門家による文字記録）にある例文は交易に関するものに限られ、これを見る限り、ルッセノルスクがそれを母語とする人々からなる言語社会の存在を必要条件とするクレオールの段階に達していなかったのはもちろんのこと、日常生活のあらゆる場面で用いられる「拡大ピジン」の段階にも達しておらず、「限定ピジン」の段階に留まっていたことが明らかであると考えるべきである。記録が残っている僅か 400 語の中にこのようにロシア語起源とノルウェー語起源の二重語が豊富に存在し、しかも、二重語ではなくてもロシア人にもノルウェー人にも理解しやすいような特異な語が記録されているということは、即ち、ルッセノルスクが両言語のいずれとも異なる文法規則と語彙を持つ言語であったとしても、あくまでもそれらの話者のうち極めて限定された人々によって、航海や海上交易という極めて限定的な場面でのみ便宜的に用いられる「補

助言語」であったことのよい証左であると言うことができるであろう。まさにこうした点において、限定ピジンは通常の「自然言語」や、もはやそれを母語とする言語社会が発生してしまったクレオール言語と大きく異なるのである。

限定ピジンとはこのように限定的かつ明確な「目的」を持つ言語であり、それゆえにこそ限られた数の語彙のうちに多くの二重語の存在を許すような許容性と可塑性を持つのであって、それゆえ、もし仮に社会主義革命によるロシア人の退潮と引き替えにロシア人と同じくノルウェー人とは母語間で意思疎通が不可能なフィンランド人がその地位を襲うなどという現象があったとしたら、ルッセノルスクの二重語のうち多くはノルウェー語・ロシア語起源からノルウェー語・フィンランド語起源のものに取って代わられた可能性が高かっただろうなどと想像しても、そこにはさほどの無理はないであろう。

4 西欧語基盤ピジンの「語彙入れ替え」

4.1 「語彙入れ替え」の実例

トッド[1986:72-74]は、「語彙入れ替え」を英語クレオールと考えられているスリナムのサラマッカン語、中国沿岸ピジン英語の近代の支流であるビーチラマー、シエラレオネの英語クレオールであるクリオ語を題材に説明している。トッド[1986:72]によれば、スリナムのサラマッカン語は英語クレオールと考えられてはいるが、その語彙には多くのポルトガル語要素が含まれ、実に 30%が直接ポルトガル語に由来するという。そしてこのことの原因をトッドは、サラマッカン語は元々ポルトガル語基盤のクレオールであったものが、英国のスリナム領有によって英語への語彙入れ替えが進んだが、1667 年にスリナムが英国からオランダに割譲され、英語の影響から切り離されたことによってそれが完全には進まなかったからであると説明する。確かに、旧オランダ植民地で英語系のクレオールが話され、しかも、その語彙に非常に多くのポルトガル語起源の語が含まれるという事実は、このようにしか説明できないと思われる。

一方、ニューカレドニア島は 1774 年に英国の探検家クックによって発見され、ヨーロッパから主に白檀を目当てにした貿易商や英国のプロテスタント宣教師団、フランスのカトリック宣教師団が来航していたが、1853 年にナポレオン 3 世によって領有宣言がなされて仏領となったという歴史を持つ。トッド[1986:72]によれば、ニューカレドニア島においては 1853 年のフランス統治開始によってフランス語が公用語になるとそこで話されていた英語ピジンであるビーチラマーが排除され、フランス語ピジンが徐々に発達していったが、その様相について「ビーチラマーの語彙が徐々に置き換えられてその核が作られ、長い間、その語彙のなかに英語・フランス語・土着の単語の混合がみられたようだ」というワーム (Wurm, S.A., 1971, Pidgins, Creoles, and Lingue Franche, *Current Trends in Linguistics*, vol.8, ed T. Sebeok, pp.999-1021) (注11)の言葉を引用して説明している。つまり、仏領となったからといって英語ピジンが駆逐されてしまったというわけではなく、長い時間をかけて徐々にその語彙がフランス語に置き換えられてフランス語ピジンとなったというのである。この

過程において、上出のルッセノルスクにおいて存在したのと同じように、(英語系の語とフランス語系の語のペアから成る)「二重語 (doublet)」が豊富に存在した時期が存在したと考えるのはむしろ自然なことであろう。

さらに、トッド[1986:73]は、西アフリカのシエラレオネで話されている英語系クレオールであるクリオ語 (ここではそれが元来はポルトガル語ピジンであったと認めるとして) に実際に存在する「二重語」の例として次の表を提示している。

表 9　クリオ語における二重語の例

英語	ポルトガル語から	英語から	日本語訳
know	sabi	no	知っている
basket	blai	baskit	かご
baby	pikin	bebi	赤ん坊

[トッド(1986, p.73)より転載]

4.2 限定ピジンの可塑性による語彙入れ替えの実現

トッド[1986:73]は、上述のクリオ語を例とした説明を「ピジンがこの段階に達すると、新しい語彙項目が必要になれば、引き続き権威語に目がむけられ、この場合は、英語から語彙を取り入れるのである」と結ぶ。つまり、西アフリカにおける「ポルトガル語ピジン→英語ピジン」という変化にせよ、ニューカレドニアにおける「英語ピジン→フランス語ピジン」という変化にせよ、新たな権威語 (前者では英語、後者ではフランス語) の話者である西欧人と現地人とが話す際に、当初において、現地人は既にそこで話されていた西欧語基盤ピジンを話す以外の方途はなく、また新たな権威語の話者たる西欧人も時にはその現地のピジンを覚える必要があったであろうが、現地人の側は当然に新たな権威語の語彙を覚えて使う必要に迫られることになるし、それゆえに徐々に新たな権威語の語彙がそのピジンに入り込み、クリオ語のように二重語が存在する状態を経て語彙入れ替えが完成に向かうというわけである。「語彙入れ替え」という説は一見突拍子もない荒唐無稽な考えであるかのような印象を与えるが、しかし、ルッセノルスクのように 2 つの言語が同権的に接触した結果発生したピジンにおいて特に二重語の存在が際だつという事実は、この「語彙入れ替え」という考えにかえって現実的な支持を与えてくれると考えてもよいであろう。

4.3 新たな言語接触による拡大ピジンから限定ピジンへの逆行と二重語の発生

バレンツ海におけるノルウェー人船員とロシア人船員のように互いに対等の敬意を払うために (相手が日常話している言語だと相互に誤信した) ルッセノルスクというピジンを使うような関係と、西アフリカやオセアニアの植民地における新来の支配的西欧人と現地人のように社会的な力の優劣が明確な関係とは対極的なものであることは間違いない。しかしそれでも、2 人の話し手がいずれも自分の母語とはかけ離れたピジンを唯一のコミュニケーシ

ョンの手段にして話さざるを得ないような場合には相手に通じるよう努力しなければならないという点で上記の両者間に違いはなく、それゆえに二重語が発生する余地が生ずるのだと考えるべきなのである。言い換えれば、新たに覇権を握った国から来たヨーロッパ人と現地人との間には確かに支配・被支配の関係があり、その点ではバレンツ海のロシア人船員とノルウェー人船員の場合とは大きく異なる。しかしながら、例えば英語基盤ピジンが話されていたニューカレドニアに来たフランス人にとって現地人と辛うじて意思疎通ができる唯一の手段はヨーロッパ系の語彙を持つとはいってもフランス語とはかけ離れた英語ピジンであって、また同時に、既に英語ピジンに相当程度熟達していた現地人島民にとってもそれがよく通じないフランス人との会話は新たな言語接触そのものであったはずである。そうであれば、もし仮にこの地域で英語ピジンが既に拡大ピジンの段階に至っていたとしても、新たな言語接触が起こればそれは再びピジン化を始め、別の言語を基盤とする限定ピジンに逆戻りせざるを得ないのである。そこで旧来の英語ピジンに変化が生じてフランス語と英語ピジンの（「英語の」ではなく）語彙による二重語が数多く存在する、ルッセノルスクに似た限定ピジンの段階に至ることになる。そしてついには、次第に権威語であるフランス語の語彙が英語ピジンの語彙を押し出していき、ニューカレドニアのフランス語ピジンが形成されたのだということになる。

もちろん、二重語が数多く存在するような状態が長続きすることは想定しにくい。ルッセノルスクや中国語・ロシア語ピジンは政治的変動によって使う場がなくなったという非言語的理由で消滅してしまったが、西アフリカやニューカレドニアにおいては新たな権威語への語彙入れ替えが徹底的に進み、旧権威語はその痕跡のみを留めるにすぎなくなってしまったのである。

5 中央アジア諸言語の研究への応用可能性

しかし、もしルッセノルスクや中国語・ロシア語ピジンが消滅せざるを得ないような政治的変動がその当時に起こらなかったら、これらのピジンはその後どのような変化を遂げたであろうか。世界の大部分の地域は遠い昔から多民族・多言語社会であり、しかも、異民族の征服や大規模な民族移動などという現象は歴史上繰り返し起こってきた、少しも珍しくない現象である。それゆえ、実のところは、大航海時代から近代にかけての西欧語基盤ピジンに起こった語彙入れ替えと似た現象も、またルッセノルスクのように2つの言語の「同権的」な接触によってピジン言語が発生した例も世界中で枚挙にいとまのないほど数多くあったはずなのである。

中央アジアという典型的な多言語使用社会における各民族による母語以外の言語の使用状況に現れる差異を考察するためには、各民族の人口比、国家による言語政策と学校での言語教育という極めて重要な要因を考慮することが最も重要であることは明らかである。しかし、ウズベク語、タジク語、キルギス語、カザフ語、トゥルクメン語といった話し手の多い言語についてであれ、話者数においては相対的に極少の言語である朝鮮語やドゥンガン語に

ついてであれ、中央アジアで話されている言語がどのような変化を被ったのかという、より深い次元においては、こうした視点からの考察が重要になってくる可能性がある。中央アジアでロシア語による強力な学校教育が普及しだしたのは明らかにスターリン時代以降のことであるが、それ以前からこの地域では多くの民族がモザイク状に散居しており、ある小言語社会が母語では意思疎通不可能な異民族に支配された結果支配民族との間ではその優勢言語をピジン化させたものを話すようになり、さらに数十年ほど後になってまた別の異民族に支配されることになって前の権威語のピジンを使って日常のコミュニケーションを行ううちにそのピジンの語彙が二重語状態を経て新しい権威語のそれに入れ替わり、ついにはそれがクレオール化してその言語社会の母語となるというニューカレドニアや西アフリカと同様の現象がこの地域での長い歴史上繰り返し起こっていても不思議はないはずである。

中央アジアのような典型的な多民族社会における言語の変化・発達および新言語の発生という現象について考えるに当たっては、例えば「ウズベク語、カザフ語、キルギス語、トゥルクメン語はいずれもチュルク語であるのに対してタジク語はインド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派の言語であるからその文法構造が根本的に異なるのは当然だ」といった系統論的アプローチだけでは足らないことは論を待たないであろう。なぜなら、中央アジアとは、これらの言語を話す人々がモザイク状に分布している社会であって、過去において言語接触という現象がその至るところで継続的に起こったことが歴史上明らかであるのみならず、現在においてもなおこうした主要言語のほか、より話者数の少ない数多くの言語に加え、事実上唯一の全民族間共通語として用いられ続けているロシア語という強力な言語を加えた諸言語の接触が日常的に起こっていることが明白であるからである。つまり、この地域における諸言語の変化と発達、そして新言語の成立を考えるに当たっては、上述のピジン・クレオール化という現象を含めた「言語接触」という視点を抜きにすることはおよそ不可能であるという認識が必要なのだと言わざるを得ない。

6 現在の中央アジアにおける多言語使用の様相

6.1 中央アジアにおけるコードスイッチング（codeswitching, コード切り替え）について

筆者は2002年8月、ウズベキスタンの首都タシケント郊外にある旧高麗人コルホーズ「ポリトオッジェル」（«Политотдел»）に在住する1937年前後生まれの高麗人2世たちの自然会話をビデオカメラに収録し、分析したことがある[柳田 2005]。「高麗人」とは旧ソ連のうちサハリン以外に住む朝鮮人の自称であるが、これは即ち、1937年にスターリンの命令でソ連極東から中央アジアに強制的に移住させられた朝鮮人とその子孫たちのことである。

2002年8月当時、この旧コルホーズに在住する高麗人2世の人々の日常会話とは、下記のように甚だしいコードスイッチングを伴うロシア語・朝鮮語混在パロールであることを常態とするものであった。

＜高麗人2世によるコードスイッチングの例＞(注12)

(キム) Училище.

(パク) Это Хореографический институт на базе бывшего Института культуры. Она лучшее образование имеет хореографическое. 그래, Анна фамилия — Тхай, 서이 Тхай, 그래.

(キム) 태, 태가.

(パク) 태, да? 노새, 그거, 쓩거는 타이라 하지. Вообще 타이라 하는 게 없지, да? Такой корейский. 그래, 이, 아주 그 새아기, 스물 두 살, 애 Анне. Возраст — двадцать два года наверное, 아즉 시집두 아이 갔소. 그 아이 такая хорошо танцует. Она танцевщица корейской танцевальной ансамбль 「고려」우리 Ассоциации корейского культурного центра. Есть ансамбль, танцевальный ансамбль 「고려」называется. Руководитель — Тен Марина 라구. 그래 그, Тен Марина, руководя, она нам посоветовала Анну, и «Политотдел» засадил, участвовала в «Жемчужине». 그래서 삼월달부터, 올해 삼월달부터 она начала учить детей, восстанавливать. 그래, 우리 어, 새해, 그럴 때두 выступала 어그네 오월달, да? 단오, 오월달에두 они в танец свера два японских танца.

（日本語訳）

(キム) （それは大学ではなくて）専門学校だよ。

(パク) あれは前の文化大学を基盤にして作った舞踊大学なんだよ。 彼女は舞踊の一番良い教育を受けているんだ。***それで、***アンナの苗字は Tkhai、***姓が*** Tkhai っていうんだ。そうだ。

(キム) ***テ、テという苗字だよ。***

(パク) ***テ***というのか？ ***ロシア語では、それは、書くときはタイとするじゃないか。 一般にタイというのはないよ***ね？ そういう朝鮮語は。

それで、その、非常に若い子、22歳だ、そのアンナは。たしか年は22歳だ。***まだ嫁にも行っていないんだ。その子が***踊りがすごく上手いんだ。彼女は、***我々の***高麗人文化センター協会の***「高麗」***という朝鮮舞踊アンサンブルのダンサーなんだ。アンサンブル、舞踊アンサンブルがあって、***「高麗」***という名前だ。指導者は、テン・マリーナ***というんだ。それでその、***テン・マリーナが指導していて、その人が我々にアンナを推薦して、「ポリトオッジェル」が採用して、（アンナが）「ジェムチュージナ」（民族舞踊グループの名。「真珠」の意）に参加したんだ。***それで三月から、今年の三月から***子供を教えて再建し始めたんだ。***それで我々の、えーと、正月とかそういう時にも、いつだったか五月に***出演していたよね？***端午、五月にも***彼らは踊りに日本の踊りを2つ紹介してくれたんだ。

[柳田 2005:116-117,125 より]

この会話サンプルのキム・マクシム・ペトロヴィチ氏とパク・イヴァン・イヴァノヴィチの両氏（いずれも仮名）はそれぞれ 1936 年、1937 年極東生まれであるが、いずれも生後まもなく強制移住によってウズベキスタンに移り、極東での生活は全く記憶しておらず、自らを高麗人の「2 世」と称している。この世代以降の高麗人たちは全ての学校教育をロシア語で受けたため、人によって程度差はあるが母語である朝鮮語が著しく衰退し、ほとんどの人が「ロシア語の方が得意だ」と言う。また、この人々の子供の世代の高麗人たちはもはや朝鮮語を能動的に用いることがほとんどなくロシア語のみで生活しており、さらに、孫の世代である 4 世の幼児たちはもはやロシア語単一言語話者となっている。このように、こと中央アジア朝鮮人（高麗人）に限って言えば、上の例のようなコードスイッチングとはこの民族集団の母語が朝鮮語からロシア語に移行するに際して現れた過渡的な現象であると言うことができる。

しかしながら、Myers-Scotten[1993:1]が明確に述べているように、言語間コードスイッチングを含む会話というものは、一般人の信じるところとは違って、主に優勢言語がある言語から別の言語に替わる際の移行段階として現れるというものではなく、（ちょうどこの中央アジア高麗人の例のように）使用言語が交替の途上にある移民の多くがコードスイッチングを行うというということは事実であっても、言語間コードスイッチングを含む会話とは多くの「固定的な」2 言語使用者の日常生活の一部なのである。そして、次項で示すように、このことは中央アジアにも完全に妥当する。

6.2 中央アジアの「固定的」2 言語使用者によるコードスイッチング

中央アジア諸国では、ロシア人や若い世代の朝鮮人のような例外を除けば、ほぼ全ての人々が日常的に 2〜3 言語を使って生活していると言うことができる。2005 年夏、筆者はウズベキスタンのサマルカンドにおいて、同地在住のタジク人の家を訪問する機会に恵まれた。その日は祖母の誕生日だとのことで多くの親戚たちが集まり、イスラム教徒ゆえに男女別に分かれてそれぞれ宴会を行っていたが、その場では全員が「身内」であるにもかかわらずタジク語、ウズベク語、ロシア語が自在に飛び交っていた。その場で同席した人々は筆者が外国人ゆえにタジク語やウズベク語を知るはずがないことを知っており、筆者に対してはロシア語だけで話しかけてきたが、ロシア語は彼ら同士の間でも頻繁に現れるのである。また、2007 年秋にはタシケントで 30〜40 歳代のウズベク人姉弟の会話を毎日観察する機会があったが、この姉弟の間でもウズベク語とロシア語がほぼ同等の地位を占めるコードスイッチング会話が行われていた。この姉弟はいずれもソ連時代にロシア語で授業を行う初・中等学校と大学を卒業したインテリであってロシア語に不自由が全くないとはいっても、姉弟間の日常家事に関する会話に、筆者の存在とは全く無関係にロシア語が頻繁に現れるのである。さらに同年キルギスタンの首都ビシュケクで 20〜30 歳代のキルギス人姉妹の会話を数日間観察する機会にも恵まれたが、ここでも事情はタシケントのウズベク人姉弟の場合と全く同じであった。いずれの場合にも、文の間のみならず、一文中でのコードスイッチングま

でもが頻繁に行われるのである。また、ビシュケク近郊のアレクサンドロフカ（Александровка）村ではドゥンガン人が全人口の95%を占め、同地の初・中等学校ではキリル字による書記法を備えたドゥンガン語を教え、かつ一部の授業をドゥンガン語で行っている。それゆえビシュケクのドゥンガン人は一般にタシケントの高麗人に比べてはるかに高い水準でドゥンガン語を保持しているが、それでも、2006年夏に観察した限りでは、ビシュケクのドゥンガン人同士の会話にはロシア語がしばしば混入し、その様子はウズベク人やキルギス人の場合と大差がない。一方、彼らは外国人である筆者と話す際にはロシア語のみで対応したが、そのロシア語は音韻論レベルでも形態論および統語論レベルでもタシケントの一般的ウズベク人よりはるかに標準ロシア語に近いと感じられた。

7 コードスイッチングとリングァフランカとしてのロシア語、そしてロシア語のピジン化の間

7.1 高麗人2世のコードスイッチングの特徴

筆者は、[柳田 2005:136-138]において前出の会話文に現れるインフォーマントのうちパク氏（1936年生まれ）による、「ポリトオッジェル」の文化活動に関する長い会話文のシンタクスを分析し、この「朝鮮語・ロシア語混用コード」あるいは「朝鮮語・ロシア語混在言語」とでもいうべきコードスイッチング言語においては、朝鮮語の単語が続いていてもロシア語の単語が続いていても、それらの分布と必ずしも一致しない形で両方の言語のシンタクスが現れるという事実を指摘した。例えば、次の文の如くである。

（パク）그리고 우리 культурный центр Ассоциация спорт — физкультура и спорт — 인기를 띠게, внимание уделяли.
（朝→日、露→英の逐語訳）［そしてわが culture center Association sport—physical education and sport-人気を引くように、paid attention.］
（日本語訳）「そしてわが文化センター協会ではスポーツ、体育とスポーツが人気が出るように注意を払ってきた。」

この朝・露混在文では確かに両言語の単語が現れ、ロシア語部分はロシア語の、朝鮮語部分は朝鮮語の音韻規則に従って発音されている。しかし、全体のシンタクスは朝鮮語であり、しかも、それが固有名詞内部にまで及んでいる。下線部は문화센터협회「文化センター協会」の完全な朝鮮語→ロシア語逐語訳なのである。

また、筆者は、この時の調査で、ロシア語の語彙のみから成り立っていても文全体のシンタクスが朝鮮語である例をもたびたび耳にした。例えば、次の2つの例の如くである。これは「ポリトオッジェル」在住の元技師カン・ヴィクトル氏（仮名、1938年ウズベキスタン生まれ。幼稚園から初・中等までの教育をポリトオッジェル内で受けた）の言葉であるが、同氏は長く軍務に就いていたこともあり、またエレベーター技師としてソ連内のいろいろな

場所で働いたという経歴の持ち主であるゆえに自ら朝鮮語よりもロシア語の方が得意であると明言するのみならず、実際に自らの家庭内において、長く小・中学校教師を務めていた夫人との間でほとんどロシア語だけで話し、朝鮮語だけで話すことには明らかに非常な困難がある人であった。

（カン）Вместе с моей женой работала учительница сегодня день рождения.

（露→英の逐語訳）[Together with my wife worked female-teacher today birthday.]

（日本語訳）「私の家内と一緒に働いていた女の先生が、今日誕生日だ。」

（カン）Вчера с вами сидел старик Николай Владимирович раньше был председателем соседнего колхоза.

（露→英の逐語訳）[Yesterday with you was sitting old man Nikolai Vladimirovich formerly was president of next kolkhoz.]

（日本語訳）「昨日あなた方と座っていた年寄りのニコライ・ウラジーミロヴィチはかつて隣のコルホーズの議長だった。」

上述のように、カン氏は確かに朝鮮語よりロシア語の方を得意とする人であって筆者との会話もその全てをロシア語により行っていたのだが、それでもカン氏の話すロシア語にはこのような文が時折現れるのである。これらの文において、カン氏は、下線部のロシア語動詞「過去形」работала（「働いていた」）、сидел（「座っていた」）に朝鮮語動詞の「過去連体形」の役割を担わせているのだと解釈することができる。そして、もしこの解釈が正しければ、この「過去形」そのものの形は正しくとも規範的ロシア語においてそれが連体修飾語として用いられることは決してないのであるから、これらの文が規範的ロシア語の形態論およびシンタクスという観点から見れば誤りであることは言うまでもない。また、筆者はこのことと関連して、前出のキム・パク両氏の長い対話においても関係代名詞が各人ともたった1回ずつしか現れないことを指摘し、それが、彼らの話し言葉にはまだ関係代名詞があまり定着していないことを示す可能性があるとした[柳田 2005:138-139 参照]。

7.2 中央アジアのチュルク系諸民族のロシア語に共通して現れる特徴についての素描

その後、筆者は2005-2008年の8～9月にそれぞれ約20日間ずつウズベキスタンとキルギスタンの両国を訪問する機会があり、その都度ウズベク人、キルギス人、カザフ人等によるコードスイッチング会話を耳にした。どの民族の人々も筆者に対してはロシア語で話すのだが、そのロシア語を注意して聞いていると、シンタクスについて高麗人と同種の非規範的現象が頻繁に現れることに気づかざるを得なかった。気づいたままに記せば、次の如くである。

1)（タシケントの30歳代ウズベク人男性場合）「私の兄弟の妻」を表現するのに、規範的ロシア語で唯一認められる жена моего брата「妻・私の兄弟の」という語順ではなく、моего брата жена「私の兄弟の・妻」という語順が普通に用いられる。これと同じ語順はタシケ

ント郊外の旧高麗人コルホーズの高麗人1世・2世においても見られる。筆者は2001年に前出「ポリトオッジェル」からほど近い位置にある旧コルホーズ「スヴェルドロフ」を訪れ、1928年極東生まれの老人リ・チョルホ氏（仮名）がその朝鮮語・ロシア語コードスイッチング文の中で「私の孫の妻」を моя внук жена「私の孫の・妻」と表現するのを聞いたことがある。また、上出のパク氏も

（パク）그래, Анна фамилия — Тхай, 서이 Тхай, 그래.
（日→朝、露→英の逐語訳）［それで、Anna family-name (is) Thai, 姓が Tkhai, そうだ。］
（日本語訳）「それで、アンナの苗字は Tkhai、姓が Tkhai っていうんだ。そうだ。」
［柳田 2005:137］

という文を口にしている。ここで高麗人とウズベク人の3人に共通するのは、規範的ロシア語においては連体修飾語として用いられる名詞の生格は被修飾語名詞に後置されねばならないのに反して、ウズベク語や朝鮮語（そして日本語）と同様に被修飾語名詞に前置されているということである。タシケントのウズベク人と高麗人のほか、ビシュケクのキルギス人についても、この (моего) брата жена や(моей) сестры муж「(私の) 姉妹の・夫」といった語順をしばしば耳にした。2人の高麗人の場合にはそれに加えて名詞が生格の形になっておらず主格のままであるという違いが存在するが、これは、リ・チョルホ氏は物心ついた以降に極東から移ってきた高齢の高麗人 1 世であってロシア語名詞の形態論や統語論を不完全にしか習得しておらず、またパク氏の場合は2世とはいっても幼少期に朝鮮語のみを聞いて育ち、インテリであって書き言葉にすべてロシア語を用いるのはもちろんのこと日常会話ですらロシア語の方が得意になっているとはいっても、このようなコードスイッチング言語での会話の際にはロシア語名詞の曲用にあまり注意を払っていないためであると説明すべきであって、彼らの母語である朝鮮語とウズベク語およびキルギス語というチュルク語との差異に帰すべき現象ではないと考えるべきであろう。ここで注意を払うべきは、修飾語となる名詞が生格の正しい形を取っているか否かではなく、ロシア語の規範に反して被修飾語に前置され、それが少なくともタシケントやビシュケクの非ロシア人の話し言葉では広く受け入れられているという事実である。

2) また、このことと同様に、中央アジアのウズベク人やキルギス人の話すロシア語においては、特に従属文を導く接続詞の位置について、話し手の母語であるチュルク語の影響によって発生した可能性のある、ロシア語の規範に甚だしく反する驚くべき現象が観察される。

例えば、次の会話の下線部に注目されたい。これは、筆者が2008年9月にウズベク人青年とともにキルギスタンからタシケントに帰り、空港から町中へ向かうタクシーの中で実際に耳にした会話である。

（ウズベク人青年）Вы слышали, что в Киргизстане цена на бензин уже снижается?
「キルギスタンではもうガソリンを値下げしてるっていうのを聞きましたか。」
（タクシー運転手）Нет. Здесь наоборот. Цена на бензин повышается.

「いいえ。ここでは逆ですね。ガソリンの値段は上がってますよ。」

（ウズベク人青年）Что? В каждой стране мира снижают цену на бензин, а в Узбекистане повышают?

「ええ？ 世界中どの国でもガソリンを値下げしてるっていうのに、ウズベキスタンでは値上げしてるんですか？」

（タクシー運転手）Больная страна потому что.

「病気の国ですからね。」

ウズベク人青年と当初ウズベク語で運賃の交渉をしていたところから見て、このタクシー運転手はウズベク人である可能性が高い。この会話の最後の文に現れる потому что という語は英語の because に相当する従属接続詞であり、従属文の最初に立つことが義務的である。少なくともソ連崩壊以前のモスクワのロシア語であればこのような位置に потому что を置くことなど到底考えられず、この文脈で許されるのは、例えば ведь のような理由を表す接続詞を文頭に置く文以外には、おそらく、英語の so や therefore に相当する語を用いた、

Ну, это больная страна, поэтому...「いやあ、ここは病気の国ですよ。それだから…」

といった非完結文のみであろう。

また、2005 年夏、筆者はタシケント出身のタタール人女性（20 歳代）が旅先のビシュケクで、キルギス人運転手に向かって次のような従属文を口にするのを耳にしたことがある。

Вчера мы в городе гуляли когда, ...　「昨日私たちが町を散歩していた時に、」

この文は、「時」を表す従属文を導く、英語 when に相当する接続詞 когда を従属文の文末に置いているという点で上出のタシケントのタクシー運転手の発話と同様に著しく非規範的である。そして、もちろんロシアの標準ロシア語という観点から見ればいずれも到底許容できない「誤文」である。このような文は、タシケントのチュルク系非ロシア語母語話者であっても、ロシア語教育を十分に受けた者であれば「誤り」であることに気づくようである。しかしながら、重要なのは、それが「誤り」であるか否かではなく、こうした極めて非ロシア語的な語順の文が自然会話に実際に現れ、それが同地において社会生活上、少なくとも「口語」としては許容されていて、また何よりも、それが、チュルク語話者のみならず、母語の語順をほとんど同じくする日本語話者にも（したがって、当然、朝鮮語話者にも）容易に理解されうるという事実であると筆者は考えている。

筆者はタシケント出身のカザフ人ロシア語教育学者ジュスポフ・マハンベト氏（ДЖУСУПОВ Маханбет, ウズベキスタン国立世界言語大学教授・ロシア語講座長、文学博士）に、

*Моей сестры муж впервые в Ташкент приехал когда, он города огромности удивился.

「私の姉の夫が初めてタシケントに来た時、彼は町の巨大さに驚いた。」

という、完全に日本語や朝鮮語と同じ語順の文を試しに作って聞かせ、これについてどう思うかと訪ねたところ、「よく分かるが、語順が誤っている」との答であった。これがもしモスクワのロシア語教育学者であったならば、非常に異なる反応を示したであろうことは想像に難くない。つまり、このような文は「誤り」とされてはいてもチュルク系言語の話者にとっては十分に理解可能であり、しかも、多くの人々が実際に用いているのである。現に、このジュスポフ氏自身が上出のタシケントのタクシー運転手と同様に потому что を文末に用いて「…だから。」という意味を表させる文を口にするのを筆者はこの時耳にした。

3) さらに、既に[柳田 2005:139]においても記したことであるが、ウズベキスタンの非ロシア語母語話者（高麗人を含む）の話すロシア語では、

Перестройка когда началась,…　「ペレストロイカが始まった時、」

[Perestroika when began,…]

Война когда кончилась,…　「戦争が終わった時、」

[War when ended,…]

Окно когда было открыто,…　「窓が開いていた時には、」

[Window when was open,…]

のような特異な語順が頻出する。2008年秋のウズベキスタン・キルギスタン訪問時にも極めて頻繁にこの語順を耳にした。例えば、次の如くである。

Я когда работаю,…

[I when am working,…]

あまりの頻繁さゆえに筆者自身もこの語順に全く不自然さを感じなくなった結果、それに「釣り込まれ」そうになり、せめて自分だけはこの語順を使わないよう努力せねばならなかったほどである。Я когда работаю のような従属文は、もしその後に主語を同じくする主文が来るのであれば Я が全体の主語とみなされ、一方 когда работаю は主文の中に「挿入」されたものと考えられて、辛うじて標準ロシア語の規範に合致するかもしれない。しかしながら、中央アジアでは、そうした場合に限らずこのような語順が頻出するのである。

同じことは英語 if に相当する「条件」の従属接続詞 если についても言うことができる。例えば、

Я если поеду в Японию,…

[I if go to Japan,…]

の類であるが、規範的語順との関係については、これについても上の когда について述べたのと全く同じことが言える。そしてまた、その出現頻度は極めて高く、むしろ если が標準ロシア語の規範通りに従属文の文頭に立つ文よりも頻繁に現れるのではないかとさえ思われる。

7.3 中央アジアにおけるロシア語のピジン化に関する試論

以上、これまでの数年間にウズベキスタン・キルギスタン両国で観察した現象を覚え書き

程度に描写したが、これらを社会言語学上どのように位置付けるべきなのかについてはチュルク諸語やタジク語の文法構造をも視野に入れた厳密な考察が必要であることは間違いないであろう。中央アジアのチュルク系言語話者やタジク人たちにとってロシア語は日常の言語生活に欠くことのできない言語であって、たとえそれを母語としていなくとも、それが「外国語」ではないことは明らかである。これは、トルストイの『戦争と平和』に描かれているような露・仏コードスイッチング言語を話していた19世紀のロシア貴族にとってフランス語はもちろん「外国語」ではなく、むしろロシア語の文体の1つであったということと似た現象であるということができるであろう。しかしながら、現在の中央アジアには、19世紀のペテルブルグやモスクワの貴族社会とは決定的に異なる点がある。それは、中央アジアが広大な他民族・多言語地域であるという地理的条件であり、また、現にソ連崩壊後現在に至るまで多くのロシア人がこの地を去り続け、またロシア語しか話さない若い高麗人たちも多くが進学や就職等のためにこの地を去り続けているにもかかわらず、少なくとも2008年現在においては、ロシア語が、民族間・同一民族内を問わず、また母語や貧富の差をも問わず、非ロシア語母語話者たちによって用いられ得る唯一の「リングァフランカ」として存在し続けているという現実である。しかし、また一方では、この地域の多言語使用の現状と今後について考察するに当たっては、この地域においてはタジク語（およびその他のイラン系少数民族言語や話者が極少にとどまる朝鮮語、ドゥンガン語等）を除くほとんどの言語がチュルク系言語であってその間の差異はそれほど大きくなく、母語間であってさえかなりの意思疎通が可能だという要素をも決して軽視することはできない。

7.2 においてこの地域のロシア語に見られる非規範的現象を一瞥したが、中央アジアにおいてコードスイッチング言語を話している人々のロシア語に見られるこれらの諸特徴と、先に述べたピジン・クレオール化や限定ピジンにおける「語彙入れ替え」との関係については、上記諸要因を考えに入れた、より深い観察と慎重な考察が必要であると考えねばならない。

ここではあくまで「試論」にとどめざるを得ないが、**7.2** の **1)**～**3)** において述べた現象はロシア語の「ピジン化」の一環であると言うことができるかという問題について少し触れたい。**1)** において記した連体修飾語としての名詞生格の前置は、ウズベキスタン・キルギスタン両国において民族の別と関わりなく非常に広範に見られる現象である。<u>моего брата</u> жена「<u>私の兄弟の</u>・妻」という語順について前出の30歳代ウズベク人青年に尋ねたところ、「書く時にはそう書かないが、話すときはそう言うのが普通だ」とのことであった。高齢の高麗人2名の場合には格変化が行われておらず主格のままであり、若いウズベク人の場合は形態論的には正しくロシア語名詞の生格の形を取っているにもかかわらず語順がウズベク語と同じであるという現象は、一見、通常のピジン化のプロセスとは逆であるかのように見える。しかしながら、これについて考察するに当たっては、高麗人にせよウズベク人にせよ、スターリン時代以降に学校教育による強力なロシア語化が進められたという事実を無視してはならない。つまり、学校でのロシア語化が最も普及していたソ連崩壊直前に学校教育を受けていた人々が話す言葉が最も規範的ロシア語に近づいているのは至極当然のことなの

であって、老人のロシア語が若い人々に比べてより「非規範的」であるということには何らの不思議もない。

前出のタシケント出身カザフ人ロシア語教育学者ジュスポフ・マハンベト氏は「中央アジア・ロシア語にはピジン・クレオール化という現象は今のところ起こっていない。しかし、今後起こる可能性は十分にある」との見解を話し、その理由として、各国ともロシア語教育の水準が低下していることを挙げていた。確かに「今後（一層の）ピジン・クレオール化が起こる可能性がある」ということについては、筆者も同じ見解を持っている(注13)。しかしながら、ソ連時代といえども、中学校相当段階で学校を卒業して就業したために教育によるロシア語化が不十分であった人々は非常に多かったのであって、そうした人々が語形変化のない、あるいは誤った語形変化をさせ、チュルク語と同じ語順で語彙を配列したロシア語を話すとしても何ら不思議はない。ソ連時代に初・中等教育を終え、さらに全ての講義をロシア語で行っていた時代に理系の大学を卒業した前出の30歳代ウズベク人青年でさえ連体修飾語としての生格の前置について「話すときにはそれが普通だ」と語っているということは、この語順がこの地域での口語ロシア語ではむしろ「当然」となっていることを示すと言ったとしてもあながち誤りではなかろう。こう考えると、ジュスポフ氏の見解とは異なり、筆者には、ソ連時代を通じてロシア語のピジン化の芽はあったが、学校教育によって辛うじてそれが抑えられていたのだと考えるべきだと思われる。そして、今後の学校教育の推移によってはこのたがが外れ、語の完全な不変化化、チュルク語の語順に従った語順の固定化という「真正の」ピジン化が進む可能性があると考えられるのである。

7.2の2)と3)についても1)と同様のことが言えるであろう。

Вчера мы в городе гуляли когда, ...　「昨日私たちが町を散歩していた時に、」

Больная страна потому что.　「病気の国ですからね。」

といった文は、全部の語彙がロシア語であると言っても、それぞれ когда と потому что を（チュルク語のシンタクスにならって）日本語の「ときに」、「から」と同様の位置に置いた文であると解釈することが可能である。もし今後このような語順が許容され、さらにそれがこの地域の口語ロシア語では「当然」だとみなされるに至れば、それは確かにロシア語のピジン化の一環であると言うことができる。

一方、

Перестройка когда началась,...　「ペレストロイカが始まった時、」

のように文頭から2番目の位置に когда が立つという語順が極めて頻繁に見られるという事実については、今のところ筆者はその原因を確認するに至っていない。しかし、次の文を

Я, когда работаю,...　「私は、仕事をしている時には、…する。」

S　V　S　V

と（つまり、когда работаю が文頭にある主文の主語と、主文の述部の間に挿入されていると）解釈することが許されるならば、そこからの類推で когда が文頭にある主語の直後に置かれるようになったのだと解釈することが可能であるかもしれない。この考えはあくま

で憶測の域を出ていないが、しかし、когда が従属文の末尾に置かれるにせよ、あるいはこの文のように文頭から2番目の位置に置かれるにせよ、それは確かに極めて非規範ロシア語的現象であり、もしそのいずれかが「誤り」であるとの評価を脱し、一般にこの地域の口語では「当然」であると見なされるに至った場合には、これも確かにピジン化の一環であると言うことができるであろう。

また、

Я если поеду в Японию,…　　[I if go to Japan,…]

については、если を日本語の「ば」や「たら」ではなく「もし」に相当する語だと誤解したとすれば説明できる可能性がある。「私がもし日本に行ったら、…」という語順は全く自然なものであるし、また、ウズベク語には「もし」に相当する語があり、それは文頭に限らず、日本語の「もし」と同様に文頭から2番目の位置に立つことも多いようなのである。上の когда の場合と同様にこれも非規範ロシア語的現象であることに変わりはなく、この語順がこの地域の口語において一般に「当然」であると評価されるに至れば、これもロシア語のピジン化の一環であるということができる。

最後に、ピジン化の重要な「指標」とすべき語の「不変化化」について触れなければならない。現在までのところ、筆者はウズベキスタンでもキルギスタンでもロシア語の用言や体言を完全に不変化としてしまったロシア語を話す者を見たことはない。意外なことであるが、上述のように驚くべく非規範的な、「チュルク化されたロシア語」と言っても過言ではないような語順を用いる者であっても、ロシア語の語形変化をよく保っている。しかし、今後の学校教育の推移によっては、「不変化化」という現象が起こる可能性も十分にあると言わざるを得ない。特にロシア語の体言の語形変化は相当に複雑であるが、そのことによって単文の枠内ではＳ＋Ｖ＋ＯでもＳ＋Ｏ＋ＶでもＯ＋Ｖ＋Ｓでも許容されるという語順の「自由さ」が担保されている。しかし、一般にウズベク人の話すロシア語を聞いているとチュルク諸語や日本語、朝鮮語と同様のＳ＋Ｏ＋Ｖという語順がロシア人の場合と比較してはるかに頻繁に現れるという印象を受ける。このことは、彼らがロシア語を話している時であってもその基盤には母語であるウズベク語があるということを示すものであり、また、上述のように従属複文においては現時点で既に極めて非ロシア語的な語順が現れているのであるから、もし今後学校教育でのロシア語教育が残り、しかも現在のようにおろそかになったまま推移するとすれば、確かにロシア語は本格的なピジン化の時期を迎え、チュルク語の語順に従って語順が固定化され、体言の不変化化が起こる可能性は十分にあると言わねばならない。なぜなら、いずれのチュルク語も他民族の反発ゆえに「中央アジア標準チュルク語」という地位を獲得することなどは到底不可能であり、ロシア語が必要であることには恐らく今後も変わりはないからである。こうした意味で、前出のロシア語教育学者ジュスポフ氏が言っていたことは正しいだろうと筆者にも思われる。

8 終わりに — 中央アジア・ロシア語の今後について

ウズベキスタンでは独立語ウズベク語を公用語化し、さらに一時期には親米反露路線を取ってソ連否定の教育を強めた。この時期、同国は多民族国家の共通語としてロシア語の代わりに英語を普及させようとの無謀な試みを行ったが、これはもちろん失敗に終わった。英国植民地だったわけでもなく、国内に英語話者などいない同国において英語を話さなければならない必然性も英語を話す機会も全くないことを同国はすぐに悟らねばならなかったのである。それとたまたま時を同じくして同国と米国との関係が悪化し、同国は駐留米軍を追放して再び親露路線に戻ったのだが、先述のように経済状態の悪さゆえにそのロシア語教育は悪化したままである。今日、同国では一時期の反露・ウズベク語偏重政策ゆえに全くロシア語を解さない大学生が発生するに至っている。首都タシケントの中に全く言葉の通じない同国人が数多く存在するという事態が生まれ、その度合いは年ごとに悪化している。このような状況下において、同国でも共通語としてのロシア語の重要性を再認識する機運が高まりつつあるが、先述のように経済状態の悪さゆえに以前のように民族間共通語としての実用に耐えうる程度のロシア語教育を行うことができるか否かは不明である。

キルギスタンではロシア語についてウズベキスタンのような排除政策を採ったことはなく、ビシュケクではタシケントに比べて一般市民のロシア語の能力が高いと感じられる。しかし、2008年現在、同国は経済状態が極度に悪化しており、ロシア人のみならず多数のキルギス人までもがロシアやカザフスタンに移住してしまうという事態に至っている。ビシュケクのキルギス国立民族大学(注14)国際関係学部専任講師オモロヴァ・ジナラ氏（OMOPOBA Динара，国際法・日本政治専攻）から聞いたところでは、このような状況下においてロシア語教育を含めた学校教育の置かれた条件の厳しさはウズベキスタンと変わらず、それゆえ大学生のロシア語能力も低下しているのだということである。両国のいずれについても、ロシア語が以前のように民族間共通語として生き続け、国民がロシア語のテレビ・ラジオ放送を十分に理解し、またロシア人と自在に話をすることができる（ロシア人が彼らのロシア語をどう評価するかは別として）という状況が今後も続くのか、それともロシア語が本格的にピジン化して「チュルク・ピジンロシア語」とでも呼ぶべきピジン語が発生するのか、あるいは完全に消滅してしまうのかについてはこのように両国の政治・経済情勢という非言語的要因に依存するところが最も大きく、現時点でその将来について予見することは極めて困難であると言わざるを得ない。

注

(1) 本稿の前半部分（1～5）は、平成17年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(C)、研究代表者柳田賢二、課題番号17520248）「現代中央アジア少数民族における言語接触に関する研究」研究成果報告書（平成19年5月刊行）に掲載した拙稿「ピジンにおける二重語―言語接触における『語彙入れ替え』の可能性に関する試論―」にその後の知見を加えて大幅加筆修正したものである。また、後半、特に6.2以降の部分は、平成19年度～平成21年度科学研究費補助金（基盤研究(C)、研究代表者柳田賢二、課題番号19520324）「現代中央アジア諸国における民族間共通語としてのロシア語の地位に関する比較研究」による2007年-2008年の現地研究で得られた知見を基に、全て今回初めて稿を起こしたものである。

(2) 本稿執筆にあたっては、上記2つの科研費のほか、平成13年度～平成14年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)、研究代表者柳田賢二、課題番号13610353）「旧ソ連高麗人の民族文化の継承と変遷に関する研究」による現地研究によって得られた知見の一部をも活用した。

(3) ここで用いる「限定ピジン」、「拡大ピジン」等の用語は、[トッド 1986]に従ったものである。社会言語学の古典的名著と呼ぶべき[トラッドギル 1975]はその第7章「言語と地理」において言語のピジン化とクレオール言語の発生およびクレオールが再びピジン化した例にまで触れ、さらにはジャマイカの言語状況を例に、同じ地域で完全な英語基盤クレオールから完全な標準英語に至る多くの連続的な言語変種が話されていてクレオールとその言語社会における権威語（この例では標準英語）との間に画然とした境界線を引くことができないという特質を持つ「社会階級方言連続体」（トッドの用語では「ポスト・クレオール連続体」）という重要な現象にまで論及している。しかし、[トラッドギル 1975]においては、本稿で論ずる西欧語基盤ピジンの相互類似の説明の一つとしての「語彙入れ替え説」について触れられてはいても「限定ピジン」と「拡大ピジン」の区別自体がなされておらず、また本稿において重要なテーマを成す限定ピジンにおける二重語の顕著な存在およびその役割についても触れられていない。このため、[トラッドギル 1975]が「語彙入れ替え説」について同書の最後でそれが主張される根拠までをも記していても、この説の現実性について読者は疑問を持たざるを得ない。本稿の前半部の主眼点は、[トラッドギル 1975]以後に提出された学説や知見を基にしてこの説の現実性を立証することにある。

(4) [トッド 1986:153]にある訳者田中幸子氏による訳注によれば、ネオメラネシア語は1975年にパプア・ニューギニアが独立した後、正式に「トク・ピシン（Tok Pisin）」と呼ばれている。同国の公用語は英語であるが、およそ300万人の住民のうち、75万から100万の人々がトク・ピシンを話すという。最近の言語学書ではもはやこの言語を「トク・ピシン」と呼ぶのが普通になっているが、本稿では[トッド 1986]から多くの図表や用例を引用する必要があるので、敢えて[トッド 1986]で一貫して用いられている「ネオメラネシア語」という旧称をそのまま用いる。

(5) ネオメラネシア語のmipelaとyumiの対立を[トッド 1986:32]の表では「複数」対「両数」としているが、その一方で[トッド 1986:31]の本文ではこれを「除外的(exclusive)」対「包括的(inclusive)」の対立としている。また[トッド 1986:33]にある例文でもyumiには「私たち（あなたと私）」、mipelaには「私たち（私と他の人）」という訳がつけられており、さらに、yumiは明らかにyouとmeが結合してできた語であることから、本稿では[トッド 1986:31]の本文にある解釈に従って表における表記を改変し、mipelaを「exclusive（除外的）」、yumiを「inclusive（包括的）」として転載した。なお、[トッド 1986:33]においても言及されているように、ネオメラネシア語の話者となった土着の人々が元来話していたアウストロネシア（Austronesian）諸語には「除外

的(exclusive)」対「包括的(inclusive)」の対立が共通して存在することは注目に値する。

(6) 引用文献に挙げた邦訳では「それはとても難しくはない」としてあったが、この表現は日本語として若干不自然なので「それはさして難しくはない」に改めた。

(7) saberは「知っている」という意味のポルトガル語動詞、pequenoは「小さい」という意味の形容詞である。

(8) これは、中央アジアのロシア語を考えるに当たっては重要な現象である。表7によればikkeはノルウェー語起源の語であり、しかもルッセノルスクにはフィンランド語起源の語彙はごく少ないのにシンタクスにフィンランド語の影響だとしか説明できない現象を含んでいるというのである。これは、後出の中央アジア・ロシア語にチュルク語の影響だとしか考えられない語順が現れるのとよく似た現象である。

(9) ルッセノルスクにおけるこのrasという語は、「回」を意味するロシア語raz (раз)に由来することが一見して明らかであるが、ベリコフ、クルィシンは[Бельков В. И., Крысин Л. П 2001:127]の脚注において、この語を含むstara ras（直訳すれば「古い回」）という句が「昨日」という意味で用いられていたことに触れている。

(10) ここに現れているli(ли)はロシア語のyes-no疑問文において任意的に用いられる疑問の標識であるが、ベリコフ、クルィシン[Бельков В. И., Крысин Л. П. 2001:128]の脚注によれば、ルッセノルスクでは事実上疑問の意味を表さなくなり、形態素の地位を失っていたという。

(11) 筆者（柳田）は、この文献については未見。

(12) [柳田 2005]において、朝鮮語・ロシア語混用パロールの日本語訳の作成に際してはなるべく逐語訳となるよう心がけたが、特に朝鮮語とロシア語が混在している場合には逐語訳とすることに非常な困難があり、これを完全に達成することはできなかった。また、ロシア語部分に対応する訳は立体字で、朝鮮語部分に対応する訳は斜体太字で表記して区別したが、単語はロシア語でもシンタクスが朝鮮語であるような文も多いという理由ゆえに、この区別も完全なものにはなり得なかった。

(13) ウズベキスタン・キルギスタン両国の大学教員に聞いたところでは、初・中等学校でのロシア語教育の質が低下しているのはロシア人がロシアに帰ってその人数が減っているということよりも、むしろ、国の経済状態の悪さゆえに教師の給与が最低限度の生活を維持することすら困難なほどに低く、教師自身の質が落ちているせいであるということであった。つまり、ウズベク人やキルギス人でも優秀なロシア語教師はいたが、そうした人々は有能さゆえに教壇を去って別の職に就き、一方、あまりの悪条件ゆえに教職志願者自体が少なく、優秀な若者が教師にならないからだというのである。こうした状態でロシア語教育が行われ、また一方で民族間共用語としてのロシア語の必要性が存在し続けるのであれば、今後、ロシア語の語彙を用いるが語形変化がなく、また、語順はチュルク諸語と全く同じであって標準ロシア語とは全く異なるという真正の「ロシア語ピジン」が発生する可能性は確かにあるだろうと思われる。

(14) この大学のロシア語での名称はКиргизский национальный университет（КНУ）である。オモロヴァ氏によれば、これはソ連時代のКиргизский государственный университет（КГУ）「キルギス国立大学」がКиргизский государственный национальный университет（КГНУ）「キルギス国立民族大学」への名称変更を経て、さらに財務上完全な「国立」ではなくなったためにこのように改称されたものであるということである。この大学では全ての講義をロシア語で行っており、また格別の民族教育を行っているわけではないので「民族大学」と訳すことには若干問題があるが、上述のような名称変遷の経緯を踏まえ、あえてこのように訳すことにする。なお、государственныйからнациональныйへの大学名改称という同種の現象は、カザフスタンでも起こっている。

引用文献

〔日本語〕

ロレト・トッド（Loreto Todd）　1986　[原典初出 1974]

『ピジン・クレオール入門』（*Pidgins and Creoles*）、田中幸子訳、大修館書店

P. トラッドギル（Peter Trudgill）　1975　[原典初出 1974]

『言語と社会』（*Sociolinguistics*）、土田滋訳、岩波書店

柳田賢二　2005

「タシケント郊外旧コルホーズ『ポリトオッジェル』在住高麗人 2 世の朝鮮語・ロシア語混用コードについて」、『東北アジア研究』 第 9 号、pp.111-142、東北大学東北アジア研究センター

〔英語〕

Myers-Scotten, C.　1993

Social motivations for codeswitching : Evidence from Africa, Oxford

〔ロシア語〕

Бельков В. И., Крысин Л. П.　2001

Социолингвистика, Москва